

やさしい音色に
のせて、音楽の
楽しさを伝える



新井理恵さん（前久保）

金管楽器の太く柔らかい音色に心惹かれ、学生のころは吹奏楽部でフルートを演奏していた。フルートは音を出すことが難しく、美しい音色を出せるようになるまで時間がかかる。それだけに、ひとつのメロディーを奏でたときの喜びは大きかった。

しかし、進学・就職・結婚・子育てと、忙しく過ぎ行く日々の中、新井さんはいつしか音楽の世界から遠のいていた。また楽器を演奏したい：心の片隅でいつもそう思いながら、時間が過ぎていった。

転機が訪れたのは数年前。子どもが通う幼稚園で、トーンチャイムという楽器を紹介された。音楽の好きな保護者の間で演奏してみたいという声があがり、新井さんも加わった。ある日、その音楽仲間からフルートの講師がいることを聞いた。かつて自分が夢中になって吹いていた楽器——。新井さんはフルートの個人レッスンを受けるようになり、さらに以前から興味をもっていたオカリナも習うことにした。「やっぱり音楽は楽しい」再び触れた音楽の魅力は、子どもたちが幼稚園を卒園して

も、新井さんを離さなかった。

練習を重ね、様々な曲を演奏できるようになったある日、二度目の転機が訪れた。毛呂本郷の「ゆずの里商店街」のイベントで、フルートを吹いてくれないかと頼まれたのだ。知らない人の前で演奏するのはじめてのことだ。それでも、「少しでも役に立てるなら」と、駅前に作られた会場で、「涙そうそう」や「世界に一つだけの花」など、なじみやすい曲を演奏した。ホールと違い、音響のない野外での演奏。しかし、大勢の人が新井さんの奏でるやさしい音色に惹かれて立ち止まった。イベントが終わった後も、「楽しかった」「素敵だった」と声をかけられた。自分の演奏に、楽しそうに耳を傾ける人びとの様子に、新井さん自身も大きな喜びとやりがいを感じた。音楽の楽しさを伝えたい——。新井さんは、この演奏をきっかけに、請われるまま、トーンチャイムやフルートを老人保健施設などで演奏することにした。

「これからいろいろなところで演奏するので、ぜひ多くの人に聞いてほしい」と新井さんという。演奏者も観客も、ともに音楽を楽しむ小さなコンサート。そんな、素敵なおコンサートが、これから町のあちらこちらで開かれるのが楽しみだ。

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ 189
大類の町並みと「宿」

毛呂山町東部の大類の町並みは、中央を南北に貫く町道に対して、ウナギの寝床のような地割りがあり、全体的に見渡してみると南北に細長い形になっています。

大類交差点付近では旧道が残り、道と道を少しずらして交差させる筋交いと呼ばれる造りが今でも見られます。集落の南北の出入口には、それぞれ石造の地藏菩薩があり、側のもは、今から290年ほど前の享保4年（1719）に建てられました。ここは、外部から内部が見通せないように道を屈曲させたりカーブさせる遠見遮断という防御を備えた出入口になっています。さらに、大類の集落を囲むように、水路が廻っているのも特徴的です。

集落を外敵から守る形は、江戸時代に整備された街道筋の古い宿場町にもよく見られます。たとえば東海道の草津宿が代表的です。また、宿場の出入口に地藏を建て、細長い町

場の周囲に堀を巡らす形は、山陽道の船木宿などでも見ることができま

す。かつての大類村の存在は、江戸時代の初めごろから知られています。鳩山町赤沼地区を中心に、周辺の村の様子を描かれた「赤沼村絵図」は、江戸時代の寛文5年（1665）に作られました。村の中央を縦貫する「八王子道」を挟んで、家屋が立ち並んでいるようすが見られます。

大類の集落に「宿場町」の役割があったかどうかは定かではありませんが、「八王子道」沿いの家々には、諸職などを表す屋号が多く残り、南北に浄国寺、大薬寺の二寺が存在しています。現在の町並みも「宿」の景観を残すたまたまいであるといえるでしょう。



大類宿北の地藏



大類宿南の地藏